

六郷満山の巡礼や儀式

日程：約 10 年に 1 回、春

宇佐市の東にある国東半島は、六郷満山という地域の山々に広がる天台宗の寺院群の本拠地です。伝説によると、仁聞と呼ばれる山岳修行者は、718 年に宇佐から国東へ神仏習合をもたらし、そこで過ごした数十年の間に 28 の寺院を開山し、69,000 の像を彫りました。八幡神の化身として信じられていた仁聞は、855 年に再び現れ、仁聞と同じ修行をしたい人のために山を通る 2 つのルートを教えたといわれています。やがて、これらのルートは六郷満山という霊場巡りとして知られるようになりました。

準備の儀式

この霊場巡り（峰入り、「山に入ること」と呼ばれる）は、神々に旅を祝福するように求めることを目的とした一連の儀式から始まります。清められた心身を象徴する白衣を着た参加者は、八幡神が地に降り立った聖地とされる御許山に集結します。天台宗の僧侶や宇佐神宮の神職と一緒に、参加者が祈祷をしたり、経を唱えたり、木製のごま祈祷棒を燃やしたりします。

参加者の一団は山を下った後、宇佐神宮の上宮（上の社）へ進んでいきます。朱色の神社の建物の前での、神職と仏教巡礼者の間の儀式的な挨拶は、宇佐神宮が神仏習合的な神社と寺院の複合体であった時代を思い起こさせる象徴的なイメージです。巡礼者が神々に敬意を払い、そして神社の境内でもう一度火の儀式を行います。

宇佐神宮から参加者は国東半島に向かいます。翌朝、熊野磨崖仏と呼ばれている崖の正面に刻まれた 2 つの大きな仏像の前で、特別な「開始」の火の儀式が行われます。儀式が完了すると、六郷満山の巡礼が正式に始まります。

霊場巡りへ出発

そのルートは、160 キロメートル以上にわたり、寺院、崖に彫られた彫像、独特の岩、洞窟など 180 の霊場などがあります。ルートに沿って、参加者は何度も体を清めたり、経を唱えたり、さまざまな身体的挑戦を行ったりします。いくつかの慣習には、高い山頂から常緑樹の枝を投げる、大きな岩から飛び降りる、深い峡谷に架かる狭い石橋を渡る、そして信仰療法の儀式への参加などが含まれます。

江戸時代（1603～1867）後期には、六郷満山の霊場巡りを集団で行うことが慣習となり、現在もそのように行われています。最も人気の時には、宗教学のための寺、修行のための寺、仏教を広めるための寺、という目的別に分類された約 65 の寺院がルートに含まれていました。しかし、明治時代（1868～1912 年）の政府命令による仏教と神道の分離によって巡礼者の数は大きく減り、

巡礼は何十年も行われていませんでした。その伝統は 1959 年に復活し、現在、六郷満山の霊場巡りは約 10 年に一回行われています。最近では 2018 年に開催され、1300 年の歴史を祝っています。